

日本哲学会林基金若手研究者研究助成研究成果報告書
研究課題: カント「共通感覚」論の認識論的な再検討

氏名: 繁田 歩
(早稲田大学哲学コース助手)

研究成果報告

「共通感覚sensus communis」の概念は近代西洋哲学における重要概念の一つである。報告者が論じているイマヌエル・カントについても、共通感覚という概念は『判断力批判』において趣味判断を理解するうえで鍵となる概念であった。しかし、歴史的にいえばこの概念にはより幅広い機能があることが知られており、美観的なものはその一側面に過ぎない。この点を踏まえ、本研究では「論理的な共通感覚sensus communis logicus」概念に着眼して、その認識論的な機能を明確化するとともに、そのカント哲学における意義を示すことを目標としてきた。この論点は、カント解釈において十分に考察されてきたものとはいいがたく、このリサーチギャップを埋めることが本研究に課せられた一つの課題であった。

カントの共通感覚論を主題的に論じた先行研究として、Nehring(2010)とZhouhuan(2016)を挙げることができるが、彼らは基本的な点で真逆を向いている。つまり、Nehringはカントの共通感覚論が雑多なテーマ性を持つことを無秩序な混乱であると解するのに対して、Zhouhuanはそこに可能な一貫性を想定しているのである。確かに、カントはsensus communisというラテン語に対して、「共通感覚Gemeinsinn」、「通常の悟性gemeiner Verstand」、「通常の理性gemeine Vernunft」、「日常的悟性Alltagsverstand」、「健全な悟性gesunder Verstand」、そしてフランス語から「良識bon sens」などなどといった訳語を当てている。このことは、少なくとも感性・悟性・理性という認識能力の三区分別に関するカントの厳格な態度に照らしても驚くべき事実であるといえよう。さらに、カントは「私は健全な人間悟性gesunder Menschenverstandの熱狂的な支持者である」(AA. 23: 59)と述べる一方で、「真理と誤謬の感覚sensus veri et falsiたる通常の人間悟性はオカルト的である」(AA. 17: 492)ともしている。つまり、共通感覚に対するカントの見解は少なくとも多義的であることが認められるのである。

報告者は、Zhouhuan(2016)の分析を下敷きとして、カントが共通感覚論に論理的なもの、実践的なもの、美観的なものという三つの大区分を設けており、それが一貫していると考えた解釈を本研究で選択した。そのうえで、これまでの先行研究においては十分に注目されてこなかった、カントにおける「論理的な」共通感覚論に議論の視野を絞ることで、本研究の課題名である「カント「共通感覚」論の認識論的な再検討」を遂行してきた。

本研究課題にある「認識論的」という言葉を理解するために、カント哲学にはア・プリオリで総合的な認識についての学説だけでなく、ア・ポステリオリな知識に関する議論もあることをおさえておく必要がある。カントの『純粹理性批判』は「私は何を知りうるか」という認識論的な議論に向けられていることはすでに広く知られている。しかし、彼の認識論は通常の認識論とは異なり、認識の可能性の条件をめぐる探求であり、その意味でメタ的な認識論を主戦場としている。しかし、このことはカントが経験的な知識を軽視し、ア・プリオリな総合判断に代表されるような特殊な認識に重点を置いていたことを意味していない。彼はむしろ知識論にア・プリオリな次元とア・ポステリオリな次元を分けることでこれらの問題に議論の余地を残していた。このことは『純粹理性批判』方法論に提示されている「真とみなすことFürwahrhalten」論に関連した議論の文脈において、彼が「信念」一般には純粹で理説的なものと道徳的なもの、そして経験的な実用的なものと歴史的なものの四種類があることを示していることによって確認できる。つまり、信念論は純粹な次元と経験的な次元に分けて考えられるのであって、後者については通常の認識論とほぼ一致する事柄が論じられているのである。報告者はこのことを以下の二つの論文で論証してきた。

繁田 歩(2020)「カントにおける「真とみなすこと」概念」、『哲学』第71号、pp. 149-158.
Shigeta, Ayumu (2022): "Kant on the Justification of Testimonial Belief", *Tetsugaku* Vol. 6, pp. 108-133.

以上のように、我々はカント哲学のア・ポステリオリな認識論に今日我々が広く認識論として理解している領域との一致を見て取ることができるのである。ここで、重要となるのが、カントにおけるsensus communis logicusは「認識論的正当化」の構造に関連しているという事実である。詳述

することは叶わないが、sensus communis logicusはカント哲学において「判断力」に接続している。カントにおいて、判断力とはそれを持っていることが当たり前の「生来の才Mutterwitz」にすぎず、真理と誤謬の両方の源泉として説明されている。というのも、我々は悟性が反省と抽象によって編み出した概念を、判断力によって具体においてin concreto使用して初めて命題の真偽をはかるが、それは経験的事例にさいしては可謬的だからである。したがって、経験的な事例についていえば、我々は判断を実際に使用するさいのトライ&エラーを通じて、徐々に判断力を鍛える必要があるのだ。

報告者はこの判断力の「訓練」において「共通感覚」の三つの格率が重要となるという解釈仮説を立てた。つまり、1, 自分で考えること。2, 他者の立場にたって考えること。3, 自分と一致して考えることの三格率である。これらはそれぞれ、1, 悟性の確率、2, 判断力の確率、3, 理性の確率と呼ばれる。つまり、論理的共通感覚に関して言えば、我々は判断力を使用するに際して、他者との批判的コミュニケーションに開かれてあることが不可欠なのである。もし我々がこの判断力の確率を持たないとすれば、それは「論理的独我論」への退行を意味しており、このような態度は人間学的にも望ましくないものである。このように、カントの共通感覚論には認識論的な機能があることを示せたことが本研究の成果である。

以上の成果は、早稲田大学とICU共催の第八回近代哲学コロキウムにて、「真理を探究することの人間の意義——カント共通感覚論の射程」として発表された。